リゾート開発は国土荒廃を残した

―北海道バブル景気狂騒曲―

渡辺　克巳

わたなべ・かつみ
1937年札幌生まれ。
北大文学部を出て北海道新聞記者。現在、札幌本社情報開発局メディアセンター部次長。前任地・滝川支局長時代にウラウスリゾート開発公社事件にぶつかる。遊落部ファンクラブと北海道みんぞく文化研究会の会員。北大ヨット部OB会員。

八十年代後半、日本列島はリゾート開発ブームにわいた。各地にリゾート施設、ゴルフ場が競って作られ、投資されたが、いわゆるバブル景気が去ってみると、今度はゼネコン汚職、手形詐欺事件など後遺症の後始末である。本道でもこの十年間にゴルフ場が約六十か所も増え、テーマパークも五か所以上、その他大型リゾートホテル、マリーナなどが開設されたが、順調に営業しているのはごく少数であり、大半は厳しい経営環境下にある。また現在十二のリゾート、二十八件のゴルフ場計画が着工を見合わせているという。

全国の金融機関が被った不良債権は、一説に七十兆円ともいわれる。これらは失敗の山というよりも最初から熱病にうなされたように走った結果だともいえるところがある。二十年前の高度成長期にも、こうしたブームを経験しているが、今回は暴対法の利き目があり、ヤクザ屋さんの債権取り立ての暗躍ぶりを聞かないのがその時との違いか。「景気は上向いてほしい、だがリゾートはご免だ、やけどがきつすぎた」が、いまの大方の心境ではないか。国土に開発の爪跡を立て荒廃をもたらしたバブル景気とは何だったのか。その状況を、振り返ってみた。

ゴルフ場は国土の一％にも

土地転がしによる不動産ブームは昭和初期のころ、米国フロリダ州で起きた先例がよく引き合いにだされるが、日本では戦後不動産ブームが三度起こったという。一つは所得倍増政策の六十年代、二度目は列島改造論の七十年代、そして今回の八十年代。バブル（泡）景気という言葉が、この八十年代後半に株式、土地、ゴルフ会員権、絵画などの異常な価格上昇を意味してマスコミに登場した。その火付け役は、中曽根内閣の手によるリゾート法（総合保養地域整備法）の制定（87年）であることはご存じの通りだ。

それではその〝あぶく〟の膨らみぶりはどの位すさまじかったか。これを数字でみよう。例えばリゾートの主役・ゴルフ場は全国で、九十二年に百八増えて二千十一となり、初めて二千を突破した（日経調査）。この総面積は二十五万haに及ぶ。さらに造成中のも合わせると三割増、三千二百三十九か所三十六万haに及ぶという（読売）。日本全土は三千七百万haであるから、四捨五入でその一％がゴルフ場に作り替えられる計算になる。全可耕地の七％に当たるというすさまじい広さである。日本国土は米国の二十五分の一なのに、ゴルフ場の数は米国（一万六千か所）の八分の一でしかない。すなわち面積比でいえば日本は米国の三倍の密度なのだ。

＜ゴルフ場の密度は米国の三倍＞

国土面積に比してゴルフ場の数がアメリカの三倍の密度というこの一事をもってしても、異常でないか。「ゴルフ場亡国論」（山田國廣編）の中で、長野県立科町民が町議会あてに書いた開発反対の陳情書の文面に、「日米のゴルフ場の数がいまや同数になった」とあるので、札幌アメリカセンターに聞いたところ米国内では推定一万六千という答。戦後日本はアメリカ文化の吸収に熱心だったがゴルフという物まねは、本場の三倍の密度まで突き進んでしまったとは！ゴルフが単なるスポーツでなく、会員権売買による利殖の一面を持つからこんなに増えた。戦前、日本中のゴルフ場はわずか七十二か所だった。かつてゴルフといえば格式のあるスポーツの筆頭だったのと比べ、いまや、日本人の行儀の悪い遊びの代名詞みたいになっている。誤解を恐れずにいえば、テレビに映るグリーンは農薬で虫を殺した静寂さであり、コース全景の熊手のような鳥かん図は醜悪と

しか思えない。

またバブル絶頂期のこんな数字もある。九十年初頭にリゾート・プロジェクトが全国で八百五十一あり（うち本道七十五）、既存観光施設再整備投資も見込めば、全国四十兆円という予測（三菱総合研究所調査）。「たった五年前（89年のころ）、都銀全体で三十兆円の含み益があった。一億や二億の貸しがなんだといっていたのですよ！」（TVH深夜番組「サテライト」神崎氏）。

官民あげて夢は実現へと滑りだした。「その突然の余暇ブームは、国民にゆとりができたから生じたというのでは全くない。需要からではなく供給サイドの事情から観光・リゾート開発熱が突発した」（佐藤誠「リゾート列島」）。

リゾート・マンション、ゴルフ場、スキー場、テーマ・パーク、マリーナ、コンドミニアム。官僚と企業プランナーの挙げた青写真が、一人歩きしまたたくまに、ゴーサインが出て実行に移されていった。これが世紀末リゾート狂想曲の姿であった。

＜不良債権は全国で七十兆円＞

泡はあっけなく弾けた。「人間のきりのない欲望が投機を呼び、暴落してもおかしくないという囁きで一気に弾ける。バブルとはそういうものだ」（古川哲夫「バブルの研究」）。東京圏の商業地の地価は八十九年までの五年間に三倍に上昇した。本州製紙の仕手戦の株は、八十九年九月の九百八円が一年後には五千二十円まで上がり、そして一年後には六百円に暴落した。バブル最盛期に三万八千円あった日経平均株価も一時は一万五千円まで下がった。一日十六億株あった株の取り引きは二億株までに減ったりした。「金融機関全体の不良資産は、都銀、長信銀、信託を合わせて七十兆円」（「エコノミスト」93・11・16号匿名座談会）と、国の一般会計予算に匹敵する数字。それに地銀、第二地銀、信金を含めるとそら恐ろしい数字になるといわれる。

堅い商売の銀行がなぜ舞い上がったか。なぜか夢遊病者のように金貸し競争に走った。いま「その責任を頭取がとれ、日銀、大蔵省も同罪だ」と批判が続いている。銀行は債権取り立てを諦めて欠損償却にしたり、思い直して裁判に訴えたり。あるいは株主から欠損分を返せと訴えられている例もある。手形がほんものかニセかを争い、地上げの残骸の商業地で居酒屋村が始まる。奇妙なエエジャナイカ的平成の光景である。

ゴルフ場の会員権相場は九十年三月に平均五千万円だったのが、九十三年十二月には千五百円まで下った（日経五百か所調査）。「入場者も平均一割減り、プレー料金も平日一万七千円から一万円に割り引いて、バブル時代に計画された所の経営は深刻だ」（93・5・31、道新）。バブル状況を推進した当時の自民党大蔵大臣の講演集が最近出たが、文中に反省を込めたバブルのバの字も見当たらず、この種の人種の忘れっぽさの好例である。

＜道内のゴルフ場は三十年で十一倍＞

本道のゴルフ場は「93北海道ゴルフ場ガイド」によると、戦前は函館（昭和二年開場）など三か所しかなかった。それが列島改造期の十年間に六十一か所増え、さらにここ十年間に五十七か所増加。九十三年末で百六十七と推測される。すなわち列島改造とバブルの二つのブーム期に増えた百十八は全体の七割を占める。さらに引き続き九十五か所がまだ増える（開場予定十六、建設増設中四十三、計画中三十六）。これら全部あわせると二百六十二になる。一か所平均面積百十haとして全体で二万九千ha近い規模。これは全道のトウキビ畑の面積に匹敵する広さである。昭和三十九年に、全部で十五か所しかなかったから、この三十年間で実に十一倍にふくらんだ。全国ゴルフ場の数の三傑は兵庫、千葉、北海道。くたばれゴルフ場！である。

またテーマパークでは、帯広・グリュック王国（89・7）をはじめ登別伊達時代村（92・4）など大型が五つ、その他新十津川、当麻の昆虫館などを含めると十か所前後に上る。さらに海洋レジャー分野で、ヨット、モーターボートの基地、マリーナが小樽築港と室蘭柄鞆などに出現し、函館港、増毛港でも計画中だ。

＜道内でリゾートの凍結十二件＞

しかし一方、道の調査では93年末現在、道内各地のリゾート計画のうち、十二の構想が凍結や中止に追い込まれている。それによると、リゾート構想を持つ自治体は全二百十二市町村の約半数、百三市町村、構想数は百二十二件。実施段階に入っているのは74％、計画策定済みが16％、構想段階に止まっているのが10％。この一年間、計画は全体としてわずかながら進んではいるが、民間資本を当てにした例は、今後とも厳しい状況下に置かれており、計画の洗い直しも迫られそうだという。

またゴルフ場で開発規制施行前に申請した六十五件中四割二十八件がいまも「審査中」で、宙に浮いた形。

事業計画段階で凍結や中止に追い込まれた構想は次の通り。

▽蘭越町・リゾートフォーレストライデン▽京極

町・中岳リゾート開発▽仁木町・フルーティー&スポーツリゾート▽伊達市・有珠湾リゾート開発▽洞爺村・早月高原レジャーランド▽追分町・ル・ペタウゴルフ&リゾート▽夕張市・夕張滝の上公園開発▽上ノ国町・中世の丘整備▽瀬棚町・瀬棚港マリンタウン▽平取町・二風谷レイクサイドパーク▽新冠町・新冠リゾート▽忠類村・村観光開発基本構想

過疎地はバブル紳士を歓迎した

バブル狂乱劇の典型にウラウス・リゾート開発事業がある。これは金融犯が中央の政治家、経済、芸能人を巻き込んで悪事を働き、世間にバブルの〝底割れ〟を告げる役割を果たし有名になった。リゾート事業は町の過疎化を食い止めるどころか、結局はリゾートで一発当てようという〝バブル紳士〟の欲がうごめく場でしかなかった。富士銀行不正融資に関わった欲の塊たちは、牢獄に繋がれ、不良債権と化した農地は逃げていかない。第三セクターという隠れ蓑のインチキさを見破れなかった過疎地は、情報過疎地でもあったのか。農村が中央人の力を借りて結果的に農業潰しに邁進する図を描いた。

札幌の北東二十五㎞、石狩川中流右岸に空知管内浦臼町がある。人口三千。道央圏のコメと野菜生産基地で知られる。ここで観光事業を誘致しているとう話を伝え聞いた地上げ屋が迷い込んだ。札幌からの距離の近さ、有り余る資金など、いろいろ好条件もある。自民党大物政治家の秘書、大蔵省官僚、芸能人など人脈を持ち、それらを束ねる悪賢いフィクサーだった。こうして第三セクター「ウラウスリゾート開発公社」が組まれ、89年から90年にかけて農民から土地（鶴沼地区）を提供させた。全体で千四百ha、うち田畑五百二十九ha、岩見沢林務署の保安林貸与地百八十ha、他に原野と山林。計画はスキー場、ゴルフ場（三十六ホール）、ホテル、コンドミニアムなどいわゆる金太郎あめ式の三点セット。

買収の交渉は、役場から出向の男がやった。彼は役場時代、農業振興を担当し農民から信頼されていた。同じ人間が、農業を縮小しろ土地を出せと説得する。理不尽ではあるが農民は応じた。道議でもある農協組合長も、協力せよと督励し、買収金額は相場の二倍、反当七十万円と好条件。あくせく働いて年収四、五百万円では後継者も保てない。三チャン農業者は、目の前に現金を積まれてこの際だと。結局地代合計三十億円、鶴沼のスキー場造成費七十億円の計およそ百億円が、農家と工事業者らに渡った。

＜政治家は政治屋でもある＞

事業規模は最初五百億円、その後一千億円に拡大。しょせんは富士銀行七千億円のバブル融資の一端である。五百でも一千でも、ドンとこいだった。公社の東京店から、資金がどんどん流れてきた。毎日がパチンコ屋の開店日かと間違うほどの晴れやかさだった。

岩見沢林務署や林野庁は道有林の保安林解除にはそれまで絶対に首を縦に振らなかった。ところが中曽根民活法ができると、タガが外れ風向きが変わった。そこへこの事業に対し松岡利勝（自民、熊本一区）、鳩山由紀夫（当時自民、本道四区）両代議士がバックアップ。その見返りに松岡氏（天塩営林署長歴任）に四百五十万円、鳩山氏に三百万円のパーティー券購入が行われた。スキー場起工式で鳩山氏がほめそやした相手こそ、公社事業のトップ、黒いバブル紳士、花田敏和だったのである。

「町長に頼まれて、大丈夫だと思った…。でもお金は返した。もう心配無用」。鳩山氏は、事件摘発が進む最中、国政報告会で選挙民にこう語っていた。政治家が権力を道具に商売し、政治屋になりさがる場面であった。

花田は裁判で肝心な部分を黙秘で通し、懲役六年の実刑（詐欺額百八十億円）。電設会社専務で、地上げ屋の二面相の竹下健一は手形乱発で逮捕。以上二人を含む代表取締役三人のうち、山本要町長だけは裁きをうけずに終わった。役場の出向職員も、北電の鉄塔移設工事代金をピンはねしていた。身内にもワルを飼っていた。第三セクターの精神をはき違えたどうしようもない事態であった。

＜地元は悪党の使い走り役＞

花田はバブルの初期に有楢川マンションという分譲億ションを東京で作り、話題になった人物。右翼の行動隊長という経歴もある。三セクが動き出すと、周囲をアゴで使い、地元勢は使い走り役に成り下がっていった。一夜、公社員をタクシーに分乗させ、滝川のクラブに乗り込んだ。百万円で借り切ってドンチャン騒ぎ。これをたしなめるどころか、出来る男は違うと羨望の目で見上げた。悪党に、田舎は扱いやすかった。花田ともう一人、富士銀不正融資事件の主犯、中村稔も共に道産子。故郷を金欲の踏み台にした。

リゾート予定地の一角に洋酒のサントリーが進出してやっと軌道に乗ったワイン用ブドウ畑がある。花田はそこをゴルフコースにするからどうかせろという。町にそれを伝えた。町理事者はまるで催眠術にかけられたように、判断力停止で悪党にかしずいた。

花田はリゾートが完成後、売り逃げる考えしか頭

になかった。自ら一円もつかわず大銀行から大金を引き出すテクニックは、地上げで鍛えた本領である。後に金融業者らが頭を抱える不良債権の一部はこうしたアブナイ連中の懐に入った。彼らはせしめた金は死んでも放さない。ブタ箱で臭い飯を何年食おうともへとも思わぬ人種だ。ジッと音無しの構えで、債権取り立て不可能、償却処分へと場面が動くのを待つ。目的とは悪事がバレないことであって、事業の成否はどうでもよい。その意味でバブル紳士は、泡銭を確かに掴んだ勝ち組である。

＜議会はチェック機能とならず＞

「リゾートでは銀行だけが割をくうだろうナ。だって俺は、土地代金をもらったし農地は逃げていかない。事業が失敗しても、耕作は続けられる。デベロッパーも損しないだろうし…」。ウラウスがキナ臭くなったころ、ある農民がこう見通した。農民の直感通りに事態は落ち着いた。売った土地でこれで四夏も収穫できた。農地は相場が下落し、担保価値はさらに下がっている。債権は一段と不良化していく。短期的には、百姓も勝者だ。

しかし大半の心ある町民は、リゾート事件をにがにがしく思っている。どこへ行っても、浦臼というと「ああ、あの事件の町か」と受け止められ、これがやり切れない。観光開発を実行して、引っ張ってきた悪玉に振り回されて徒労に終わった。青い鳥（理想）は地上から見上げるのであり、捕ってはだめなのだ。「過疎化、老齢化する地方の生き延びる道は、やはり正攻法で探し求めなくては。農業だってやりかたは、まだある」と、反省の声が聞かれる。

町民の関心度という点で、こんな場面もあった。大手ゼネコン業者が、工事現場への出入り業者を選ぶ説明会で、「この中に反対派、自然保護運動の連中はいないだろうな。いたらつまみだすぞ」と警戒心を示した。そのうえで息のかかった業者を選び、クマゲラのすむ森、ランの名所の斜面を、ブルドーザーで丸坊主にしていった。この話は町内にすぐ浸透した。町民は、この事業は自らが積極的にかかわる対象でないと、ここでも直感しただろう。最初からたいして期待していなかったし、町民レベルでの論議も起こりようもなかった。

町議会は観光事業推進を二度も決議した。町当局はそれを錦のみ旗に行動に移った。そして事業が動き出すと議会は尻叩き役に回り、チェック機能の立場を越えていた。調査特別委員会もマスコミが来ると議員協議会に切り替えて、取材を締め出した。大プロジェクトを進める公社の二十人程度の態勢は余りにも不備だったし、東京店はブラックマネーの洗浄役だった。それらを行政側が合法的にクリアーしていくには、これまた全てが足りなすぎた。そこには甘い見通しと無責任な弁解の繰り返ししかなかった。

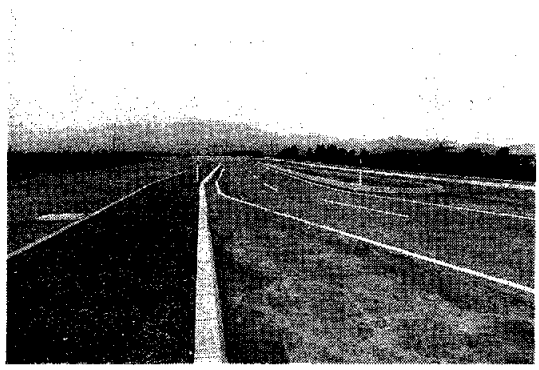
推進派町議の一人は問題がこじれてきたとき「リゾートなどは、まともな業者は手をださぬ。多少行儀が悪くても元気の良い業者でないと、きてくれない。農地法は転用を厳しく規制している。悪法だ」と持論をぶっていた。元気印なら、法を曲げてよいという理屈は法治国家では通らない。こんなへ理屈が議会を牛耳った。周辺人物に疑惑が高まっても、それらを終始かばい続ける町理事者の姿は奇異であった。当然、正論の少数派町議、批判的意見の町民は孤立していった。

＜東京人はひと儲けのつもりで＞

俳優・津川雅彦氏はサンタランド構想で広尾町と喧嘩して有名だが、花田から企画料一億五千万円を貰った。ここにマスコミが飛び付き、事件が派手に扱われた。西郷輝彦氏も取締役に名を連ねた後「軽率だった」と、テレビで弁解していた。リクルートの江副さんも、浦臼の山頂で花田と語り合う場面があったという。富士銀行バルブ事件の最大の立役者、中村稔も何度か足をはこんでいる。時の大蔵大臣の取り巻きで、夜の東京銀座でカオだった大蔵省主計官もわざわざ立ち寄った。しかしこれらの金権亡者どもは地元民の一人の町議会議長とは接触せず、ターゲット外であった。

浦臼はメロン、イチゴなどうまい野菜の産地である。高台の畑の男爵イモは農民が特に自慢する。また手刈り天日乾燥そばは日本一の風味、と札幌の製めん工場が評価した。そこへ雪崩れ込んできた中央人士たちは結局、捕らぬ狸の皮算用しか弾かなかった。「ひょっとすると、俺もリゾートの上がりで懐が暖かくなるかも知れないぞ」。そんな便乗気分だったろう。「この町に骨を埋めて、観光で町興しに汗を流すー」そんな殊勝な人物は誰もいなかったのである。欲と二人ずれの過疎地に咲いたしょせんは仇花でしかなかった。ゴルフ会員権を買う時に近い寄り合い心理だった。

いまスキー場予定地の解除保安林は四度目の冬を迎えている。松林とコースの境目の樹木は倒れている＝写真①＝。斜面の表土は融雪期や大雨の度に赤土をオサツナイ川に流し込み、美田を汚した。また計画途中で終わり、片側だけ舗装したリゾート道路＝写真②＝は、場所によっては農地を分断した。Aさんはこの迷惑な道路のお陰で、不便なトラクター操作を今後とも強いられることだろう。公社に「絶



写2　幅23mもあるリゾート道路（浦臼町道）。出番がなく左半分は砂利で覆われている

写1　浦臼のスキーコース用斜面。解除後の保安林では大雨のたびに樹木が倒れていく

対に大丈夫だ」と説得されて、農地をしぶしぶ提供した結果が、心配の通りになった。さらにある農家では老婦人が油絵をたしなみ、リゾート公社のパンフレットにあるスキー場の完成予想図を模写していた。リフトが行き交うその構図は、やはり最初から「絵に描いた餅」でしかなかった。

壮観、北海道中、問題事例の山

八十年代後半から立案、実行されたリゾート事業や道路、河川の護岸計画などで、問題点が指摘されたケースはいくつかのパターンに類別できる。その事例を主に新聞などで報じられた中から拾い、大別してみた。

＜専門業者型＞

◇占冠村のアルファリゾート・トマムのホテル群の一部が工事代金滞納で施工業者が仮差し押さえ。全体で35％四百人の要員合理化へ。

◇赤井川村でヤマハが進めている総合リゾート「キロロ」の分譲コンドミニアム（六千四百人宿泊規模）を計画見直し（日経記事）。

◇三セクのカナディアンワールド（芦別市）の入場実績不振、累積赤字が資本金を上回る。

＜バブル紳士ちん入型＞

◇東京の情報処理会社ＩＯＳの社長が富士銀行支店課長らと共謀、鵡川、鶴居、東旭川にゴルフ場を計画したが、二百億円の詐欺などで懲役七年判決。計画とんざ。

◇ウラウスリゾート開発は、富士銀不正融資に絡む民間デベロッパーが逮捕されて、挫折。百億円浪費して自然を破壊。中央、地元合わせて逮捕者は六人以上。

◇中富良野町が誘致したリゾート会社（東京）のオーナーが元組幹部で、町は三千七百万円を預かり、裏会計を設けていた。ここは中曽根民活リゾート法の栄えある本道第一号指定地。

◇九十二年夏開業の栗山パラダイスヒルズゴルフクラブは五千口の会員権を乱発し、販売には暴力団系の業者も関与。

◇札幌市新琴似農協の乱脈融資が表面化し、伊達市内のゴルフ場開発などのために役員が八十七億円の不良債権をこげつかせた。

◇美瑛町に造成中のゴルフ場では、農地法、国土法違反で、札幌の開発業者ら三人逮捕。無届けで十三戸に農地買収地代を支払っていた。

◇札幌の農業者が、江別市江別太に持つ農地にゴルフ練習場を無許可で作り、三年後に発覚、原状回復命令が出ても無視。

◇新十津川町第三セクター、昆虫生態館むしむしランドは、札幌のデベロッパーやその連れてきた昆虫マニアに無責任に牛耳られて、初年度で挫折。

＜反対運動デッドロック型＞

◇浜益村に札幌の開発業者が計画したゴルフ場は、無届け土地取り引きがバレて、反対住民が監査請求を出して撤退。

◇室蘭市はむろらん高原だんパラスキー場の二期工事を、水源かん養林保安林解除がむりとみて一時凍結。環境調査報告書の記述ねつ造が批判を浴びた。

◇上士幌町が誘致したコクド（東京、堤義明社長）のゴルフ場計画に対し、よつ葉乳業の牛乳を共同購入する道外の消費者グループが、牛乳が農薬で汚染する心配があると反発。深刻な対立を招いた後、道が開発を許可。百六十七ha、36ホール。反対派は、国に道の認可の不服審査を求め、却下されたら提訴する局面に。

◇八雲町が計画している砂蘭部岳リゾート構想に、八雲町の自然と子供の健康を守る合同会議は、開発の断念を要請。

◇既存三カ所のゴルフ場が倍増となる雲行きに七飯町民が町議会に規制強化の条例制定を直接請求したが、議員の九割に反対されて否決。

◇北海道横断自動車道の千歳ー夕張ルートの計画で国蝶オオムラサキの記述がなく、営林局の指摘で調査やり直し（93・6、道新）

◇上士幌高原道路の計画で、道がナキウサギの評価点を故意に低く抑えて、道自然保護協会に指摘された。

◇アルファリゾート・トマム（占冠村、南富良野町）の拡張事業について、希少魚イトウの生息調査の手抜きを指摘される。

◇音更川のサケの産卵床が、帯広開建の護岸工事で破壊される。

◇サホロ・リゾート（新得町）の計画は、事業者が審議会に事前にうかがいを立てたうえでアセスを提出、「アセスが開発の免罪符になっている」と、自然保護団体の猛反発を浴びた。

◇積丹町の町有地に生活協同組合コープさっぽろが進めているリゾート「ふれあいの森」建設現地で、伐採木などを無許可で投棄している、と札幌市の自然保護運動家が指摘。

◇大昭和系列の会社が白老町にゴルフ場を計画、漁民の反対で36ホールから27ホールに縮小した後、本体のドンの逮捕で立ち往生。

◇国定公園内を通過する一般道路（雨竜湿原近く）は好ましくないとする自然保護団体の反対姿勢をはねのけて、道環境影響評価審議会（笹森秀雄会長）は、アセスを了承。

◇広島町富ヶ丘に計画中のゴルフ場に市民団体が中止を要望。同町内にすでに七カ所もあり、許可した道にも疑問を出した。

◇ヤオハンが札幌茨戸に二百五十haの大規模リゾートを立案中だが農振法の壁にぶつかり、九十六年以降に先送り。

◇標茶のヌマオロ川に釧路支庁が設置した魚道が、魚も通れないズサンな造成工事。

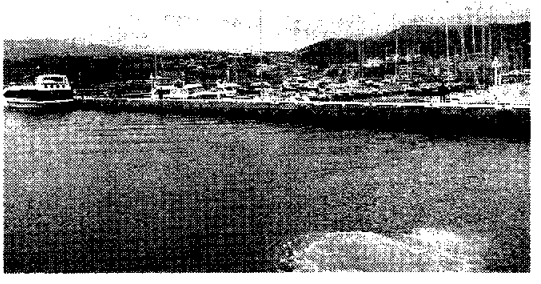
＜成功例はごくわずか＞

◇グリュック王国（帯広）は八十九年の開業いらい毎年入場者を二万人ずつ増やし九十二年は七十万人を記録。その三割がリピーター。

◇登別の三施設、「マリンパークスニクス」「伊達時代村」「中国天華園」も、札幌圏に近い地の利や相乗効果から、計百六十二万人の入場実績（92年）。

◇石原裕次郎記念館（小樽）は九十一年七月の開館いらい二年間で二百八十万人が入場。

◇外洋艇の基地、小樽港マリーナが九十年に開設。裕次郎館の隣、初年度で利用艇が、目標の三百隻に達した＝写真③＝。



写3　小樽築港マリーナ。三百隻の会員枠はあっという間に埋まった成功例

鳥たちと同じ目線に立とう

高度成長期とバブル期の二つのサイクルで本道にゴルフ場が百二十も増えたことは事実である。また今回、バブル紳士がどっと乗り込み、法に無知なリゾート事業を推進した結果、自然生態を蹴散らかして、バブルの墓地を築いていった。これだけ膨大なエネルギーの浪費は、必要悪だったのか。日本人の業（ごう）か。いま求められるのはこの徹底した検証であり、それがなければ、十年後に同じ過ちを繰り返すしかない。リゾートもテーマパークも結局、土建屋ペースでなく、利用者側からの創意の問題だと思う。官民挙げて本腰を入れた調査分析の態勢を期待したい。

＜中曽根さんはヤクザを呼び込んだ＞

行政の指導性の不徹底という面で、中富良野町は好例であろう。ここは本道初のリゾート法適用地である。リゾート開発に絡む町の裏会計は、道や行監が一旦察知していながらその後の指導が不徹底だったのが悔やまれる。ここで四千万円近い金を〝餌まき〟したのは、新潟県下の稲川会系の暴力団元幹部である。「ゆとりある国民生活の利便増進のために、その当該地域の振興を図り」とうたった中曽根立法が、何とこんな連中が舞い込む露払い役だった。ちゃんとチェックしていれば、排除できたはずだ。ヤクザ屋さんは、とにかく三セクを隠れ蓑にして、地元のトップと、金をエサに抜き差しならない関係を作

る。人の良い道産子はこの罠にまんまと引っ掛かってしまう。

これらは脇の甘さであろうが、転勤時に餞別を一千数百万円も受け取っていた釧路土現幹部の例は、自らお膳立てするからたちが悪い。業者の会合で特定道議の後援を強要する妙なパフォーマンス役人である。美瑛のゴルフ場計画では、道保健環境部職員が、捜査資料を業者にこっそり渡していた。

役人の不正、逸脱で不愉快なのは、業者が食うために、法を犯してでも仕事を欲しがる。それに応じて官吏が片目をつぶり、天下りする。その軟着陸を、当然視する風潮にまで癒着が日常化しているからだ。談合が日常化すれば、納税者でなく業者の方を向いて予算を組むだろう。

＜行政よ、公のスタンスを取り戻そう＞

道職員の天下りは平成三年度に三百八十八人おり、十年前より三割も増えているという。天下った民間会社の中には三割も発注率が伸びたところもあるという。最近では役人の落下傘人事が頻繁すぎて、下った先の仕事を増やす役目を二年くらい努めれば、使い捨てだとも聞く。魚の上れない魚道を作る神経は、魚と水の道理はどうでもよい、魚は文句を言わぬといういい加減さを感じる。

道庁で農政部幹部がゴルフ場の割引きプレー券の斡旋役を努め、希望者を集約するために、廊下を走り回っている、という話があった（92・12、2道新）。利用者は年間一千人にのぼるそうだ。日曜日に人がどう過ごそうとカラスの勝手ではあるが、ゴルフに熱中のあまり、ゴルフ場が札幌とその近郊に六十か所もあることに驚く感覚は、おそらくないだろう。一自治体三か所以内という輝かしい道の設置規制はどう守られているのだろうか。「民」の私企業的利潤追及をセーブする「公」のスタンスが失われていくことが恐ろしいのだ。

また全体を見渡す感覚も育たないから、指導・調整機能も稀薄化する。リゾートが乱立し、過当競争、共倒れする状況に責任はないのか。「そういったって、それぞれの自治体の熱意に水を差すわけにいかないし」。道議会答弁などでも、とかくこういう情にほだされた弁解が多い。これは「公」を忘れた悪しき小市民意識であり、リゾート問題を見詰める知事から末端まで、染み透っている姿勢だ。

この際役人が短時日でポストを代わる形はやめてほしい。むしろ同じポストにいて勉強し五十年、百年の先を立案するスペシャリストに専念してほしい。いま強化すべきは道議会対策部門でなく、生活文化課など長期展望を練る部署なのだ。天下りしなくてよいだけの定年後の生活給も保障しよう。

＜作る側でなく、使う側の発想で＞

ここにヴァカンスに使う費用は、フランスは一人一日平均三千四百三十七円で、日本はその七倍の二万三千三百七十円というデータがある。（梶木雄一氏算出）また年間一人当たりの平均宿泊日数は、フランス二十九日、日本二日だとも。こうした数字の違いは、それぞれの生活文化の歴史的総体的成果を表していると思う。この数字の持つ意味は非常に重い。豪華な施設に寝泊まりして短時日でパーッと金を使って、疲れて帰るのが日本側。逆がフランス。遊び、休養に対する認識の違い、稲作と肉食などいろんな要素を考えさせられる。そんな秩序を比べて、提供者と利用者の望ましい関係を模索する。比較検証と全体調整を道、国の行政にやってもらいたい。

テーマパークのグリュック王国は、ほとんど例外的に、拍手を浴びたケースといえよう。この施設はドイツの生活文化とはーという提案の気迫の片鱗が感じられる。ドイツの石づくりの農家を丸ごと運び込んだ結果、街や生活がほんのりと立体的に見えてくる。それが魅力だ。九十二年夏、地方のオペレッタを楽団付きで持ち込み、一か月間テント公演してみせたが、これが正解なのだ。逆に「外国」を芝居のかき割りのように提示するだけでは、何だ、テレビドラマのセットかということになる。バブル期の建築は、デザイナーに腕を存分に発揮させたが、利用者はヤジ馬根性の域を出ていない。作る側の発想の押し売りでなく、遊ぶ側の創造的視点に耳を傾けたのが、ヒットしている。この違いは単純明快だ。

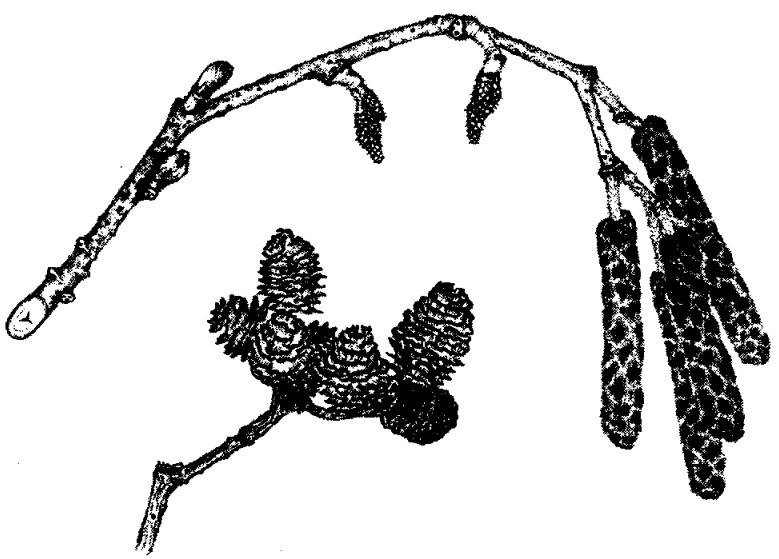
とはいえ、限られた対象人員に対し、全体の開発事業は多すぎた。一人の人間が行楽に出掛ける機会は限られる。なのにそれぞれの施設が、お客は皆自分の所にくると当てにして計画を立てている。この矛盾をどうとらえたのか。目をつぶったのか。政治も行政も、私たちは使用前にかかわったが使用後は知りませんといわんばかりに、傍観を決め込んでいる。

話は飛ぶが九十一年春、東滝川の住宅地にクマゲラが営巣した。アマ写真家たちは色めきたったが、私は感動よりも心配が先立った。なぜならクマゲラの、本来の居住地である赤平や芦別の山に人間が入った結果、鳥が逆に里に下りてきたのではないか、と思ったからである。開発行為を律する規則はなるほどある。しかし人間は森を切る時、動物や植物に、じゃあいいですか？と語り掛け了解を得ているだろうか。彼らが山で安心できる環境を奪い、ちっとも配慮せずにブルドーザーを動かす。これがいまの現

実である。ゴルフ場が一村一品的にたくさんできているが、「クマゲラの寝床があぶないから待て」という声はかかった試しがない。動植物の生きる権利を、開発行為に具体的に照らし合わせる問い掛けを、市町村の窓口に持って行っても、変な顔をされるのが関の山だ。

環境審のメンバーにしても、権威ある専門家が長期に腰を据えて、慎重審議しているよりも、アマチュア精神を尊重しようではないか。諸般の事情を知り尽くした先生が配慮するよりも、「もっと人間らしい生活に戻ろう」と判断する当たり前の感覚を優先させよう。

道自然保護協会も各地の人にもっと積極的に話を聞き、全道的な状況を掌握すべきである。持てる頭脳は行動力を付けるべきだと思う。協会は美々川流域と日高横断道路の重点主義、あとは現地で取り組めでは村社会に風穴は開かない。

さきごろテレビ番組で北海道各地で流行のライトアップ作戦を紹介していた。都市を彩る夜間照明は盛んであり、百万ドルの夜景を街興しに結びつける熱意は理解できる。しかし夜休む鳥や草花にはストレスであるという思いに触れる発言がなかったのが気掛りであった。ここにも人間は、鳥や花と地球の同居人だという、開かれた視点がない。人間だけは地球を痛め付けてもよいという旧世紀的認識にとどまっている。いま一番心すべきは、人間だけが地球を少し傷め過ぎたなという思いであり、「ごめんなさい地球さん」の精神ではないか。

（会員・札幌）